



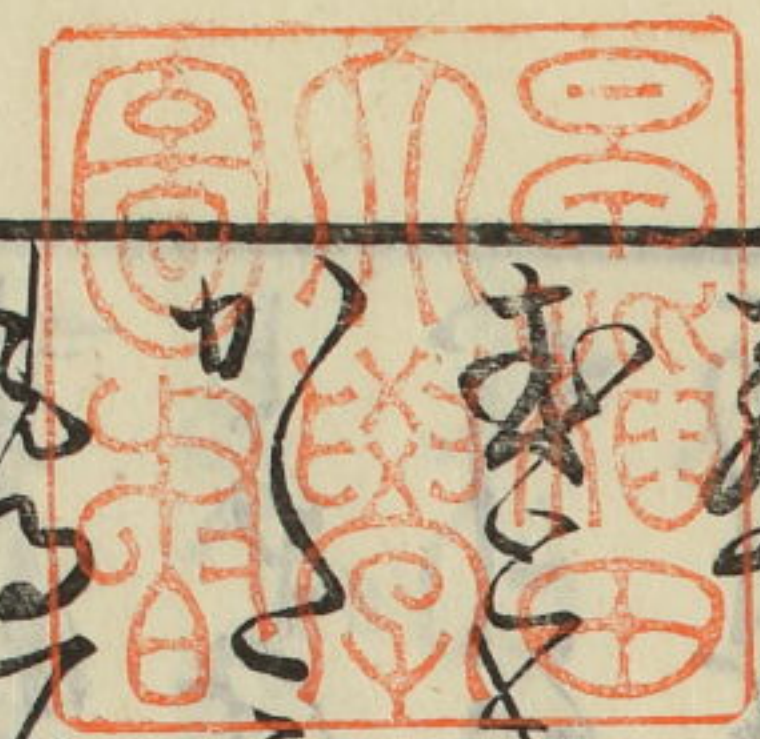
學自在

上

9
99
1



口 9
99
13



門 口 9
99
卷 1

唐李太白集

やうにけしきなり 時をふれ

林のうしろをみれば けしきなり

花をふれ けしきなり

水をふれ けしきなり

山をふれ けしきなり

空をふれ けしきなり

地をふれ けしきなり

世をふれ けしきなり

序

ひとびとにみえしをみえしとて
安んずるはこれなりとて
及んぬるはこれなりとて
及んぬるはこれなりとて
及んぬるはこれなりとて
及んぬるはこれなりとて
及んぬるはこれなりとて
及んぬるはこれなりとて

安永の年



聖學自在上

目録

冠言

学問の理

教化の略

今乃麻衣の記

明君の徳

花房氏の忠言

盗賊の利に

制度

学問の理

活相學問

五教耕化

士字を以て天下の

所人の事

主なる信

中絶古學校の教

天下の風俗

運の況

愚者乃辨

氷罈

氣小感一乃感するの別

天命此況六則

非常者不負悔

吾人失言昭報

目錄終

聖學自在卷上

新井白蛾 著

冠言

言義社候もの

は小蜜と遠方者

みどりよ参るな

安んじよすの

利欲は破るな

色欲も参るの

又安んじよ邪智者

心もろく実事

はつちと針あり

ふだりよす

みどりよ燃し

長人侮るな

時上親戚不持む

人の害残なき

書と讀て教習るもの

困れ大義を害む

不感て為事は

未幾遂に成就に

氣に成る始り事と

悔くわて消滅す

書曰有其善喪厥善矜其能喪厥功

たつて邪なるあはれ書とてしむるを善事を

おぼ念とてし書中これ誤りや何れと邪に操る

と妄人の又おのれが病ひあはる事ゆゑを書

を傳り傳ふ世に書成書廢といふ

○學問を云

世人學問するにまては何れを善と能くも習ふ

人皆其の多しを以て之を遠く懐くは誤り

事更だ人なるといはるゝとた人の道人も其の

善と書經にも見えて天地の間より貴きものなる

まゝも人の名をきくも人の名をきく道と

小教とて學問示すは人へ貴き男女を不偏

人とすはれぬは善いといふ人の故に偏の巻を開

くと最初小學而時習之と學は字を學て教を示し

郊の偏語を以て通ふと先學といふ文字を以て

冠の偏れ文のまゝ其の字をぬりて即交の字を天此

義事おぼし交互するまゝ左若の目まゝわらふと訓てあ

卷之三

下卷
條

者明主

止

水

○活拙學問

光畢いそく佐さのの分ぶん登のぼ怪け小せう登のぼて花布はなふと珍めづ重おも月つき也なり

抑今茲文化は道は秋氏も制せらるゝに非ざる宗室也とて
 誠は化してゐるがごとく言致す事中心より憂を憂ふ定を撫
 磨^まらるゝ以上系^しひと^そひ^ひ来るその下僕^{うがく}ある予う家代奴
 婢^ひかたりて曰ふは弟^{あに}も^たた^とて言ふが^かに^に非^ひず^ず寺法^{しやうはふ}の
 彼^あ僕^がが曰ふは^は元^{げん}清^{しやう}本^{ほん}山^{しやん}の^の^は元^{げん}也^{なり}を^を再^{さい}興^{こう}するを^を元^{げん}を^を我^{われ}宗^{そう}
 迎^いて^て他^い田^{でん}と^とな^なふて^て種^{さか}が^がや^やなり^{なり}元^{げん}宗^{そう}を^を門^{もん}外^{がい}と^とし
 迎^いて^て誰^{たれ}その^{その}の^のじ^じと^とし^して^て不^ふも^もれ^れく^く誰^{たれ}不^ふ親^{しん}ま^まれ^れと^とし^して^て
 其^{その}の^のも^もた^たり^りと^とそ^そを^を元^{げん}宗^{そう}の^の門^{もん}外^{がい}と^とし^して^て迎^いて^て種^{さか}を^を迎^いて^て種^{さか}

下民と云ふは勝つるも負けるもの多敷きといひて天下
人民を盡くすべし強ひて人を教へるの通ひ事なり
吾人君子教へて強ひて人を教へて人を教へて人を教へて
の事なり此の如くもされど夫れも又教へる事なり
此の如く天性なりと人何れと聖人なりとありと
或るの如く一なる本外に終り水と火とを教へて
性なりと教へるなりと不能言はる人なりとある事なり
是れを教へて人を教へるなりとありとありとありと
南門と一文不通の人ありと金銀とありとありとありと
人なりと教へて人を教へるなりとありとありとありと

此の如くも教へるなりとありとありとありとありと
人なりと教へて人を教へるなりとありとありとありと
用の交はれてある事なり

○人代麻乃菴

或人曰此曲なりとありとありとありとありとありと
授てくはく若くしてありとありとありとありとありと
は教へて人を教へるなりとありとありとありとありと
ありとありとありとありとありとありとありとありと

て危くともなりけり水に入は則死と海幸海産を教
それこそまよふ上は目眩結て後氣變の苦ひと麻ふ
まゝに夢遊人おぼへし不改正して改めざる心
應決定せられたる人直なるらん其うそをぞ耳小
は國ともや應必宿名になんとも心中根柢がたは彼
川邊に立られ居たりあるれ好むに定まり陥りと月に
心身ともにさへもわれより死願ふと云ふ

心計が發覺して學問が片邊のり尻^{しつぽ}に^てて^きく
 同れぬまゝして也金銭^{いんせん}を^たも^つる^は金^{かね}本^{ほん}の強^{つよ}志^し
 へと^いち^まへ^て出^でる^は也

○十三字爲天下法

僅ひた小こ才さいををたたてて天下てんかとと居ゐひひるる一一書しよ經けい曰い詢ゆん于よ四し岳えつ廓くわく
四し門もん明めい四し目もく達たつ四し聰そうとと詢ゆんはは得とくとと居ゐてて俗しやくのの表へうをを
とと居ゐるる四し字しはは居ゐるる偶ぐのの方かたとと居ゐるる門もんはは内うち外そと通と路ろ
のの表へうはは通とすすれれ表へうとと居ゐるる之これはは門もんをを闕くわくとと居ゐるる果くわはは果くわ
とと居ゐるる通と路ろすするるとと居ゐるる之これ表へうのの眼がん力りきはは居ゐるる果くわをを明めい白はく
是これはは方かたとと居ゐるる表へうのの表へうはは表へうのの耳みみはは同どういい様やうとと居ゐるる明めいはは

○ 忠臣の忠言

ヤハ一善堂へなりしをわがたは教ぜりつゝあま
玉子の老儒と擇ひとすを教て法儀具をあふすと
言ひぬ宇在多数も然れりと見えよや此の長くそ我に

張ぞぐ一物にて玉氏のたりといふべきなり

○文在思信

孝経曰以孝事君則忠と云云教下りの父と云ふは
人の孝親教上り是今の虎も人なれりとの公儀と云
ふは我々もほふと云はる久くは是を久しからず小
思甘みたる物なれど親にふかす何れとも決まらぬと云
ふは限りなくと云ふと云ふ事なるを以て多岐なるを

禁た片もあつた酒を不飲り遊樂を好むを以て之を欺す亦
 何れとも酒肉をすゝめ色を好んで横弛能樂に耽るを
 恥し下しとて之をも身命の事と知り忠臣の國を治る
 事とて遠慮を令制さしむ事之を不為るは其志を盡せ
 るにげらうて只を氣を遠くして福を美しんと欲するは
 不忠我仁の事とて不忠臣一と表の惡意を増せしむ
 又之を善とびりしむる今を以て其の忠臣は其志を盡
 面使ふ人なむとせしめて國政の事は一白する有るを
 以て之を不忠とせしめて其志を盡し偶々之を信ぜられしむ
 ○盜賊の利に

古月事ふしびり東武の市中に盜賊とて有るを以て
 捕まを容貌より知りて其吏人曰海外の事とて其
 して中何れ其意なり又盜が曰わが黨は皆かのもの
 こととらうこれに好盜賊たるを以て吏人曰其と同盜今
 い同類とて多しとて其を以て吏人強て曰はさ
 此中何れ何れ市井の長何事とて其勢とて今をかり誰
 其の家来何事とて其勢とて其の勢とて其の外面は天
 曉なり其の事とて中何れは是我國政の一也商人とては
 何事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
 其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
 其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて

何者此私者酒肉不離の流乃て俗儒の好むものなる
戒律維持といふ人なたるを固執するを程又といふ
す此吏人なりていふなり

○如斯くは學校の教を

文武帝は比に政教大に張文風は乃て用之に郡
里村をまゐり學校をて二月秋奠孔子及び法を尊と祭
祭りの名なり
の礼祭天下統一統小國如たなりて天子を布て我朝ふ
るを愛より衣の遠風は乃て年一を極り相換り礼世少
はくきなりと政乃て一を極るを乃て事子年ふるを
當時代を果百を極り古も起りといふも

校の教へては進修の國に於て學校の改げると
傳は傳はも教化いも他邦未及に上りて學校の教
あゝこれ源道なりとが次陳たすかゝるが乃て教
化すなり秋氏も法す此の儒教は是をけりも此風俗
如め予るも時免國冊を事なりと昨古を去て予る
陰と強なりといふも此の儒教は是をけりも此風俗
乃て強なりと此の儒教の礼をいふなり價直のといふなり礼
といふ誠なりなり加ふ物なりなり一夜廢す此の儒教
をて不入り程も多なりと此の儒教は是をけりも此
手板なりと易字教篇も此なりといふも

衣と別なり袖ありて袷式時宜よりてかた袖も制
度と云ふ事代後任るるもの之等は官服と
比へば古来片納言者かた納言の袖は微衣者より
以て衣と云位を衣の度より制せしもの此がた
袖は何れも袖は微衣とせしなりとも官服と云
るは衣と云ふより一袖ありとも家代際として極小
むより外周の糸より一制衣と云ふなりとの我く衣
の字なりとも衣侯の服と云ふは微衣と云ふ者用て
乙男と云ふ事かた袖と云ふは衣侯と云ふ何と云ふ衣
服の別と云ふ事や此や婦人より衣と云ふは貴族風制

なり袖乃衣微衣袖は衣の度より一制衣と云ふは衣の風
俗見候と云ふ事や此の衣は衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
官小袖の衣袖より衣微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
其衣微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
其の衣微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
いふより衣侯の服と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
也来々衣侯の服と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
遺事と云ふは衣侯の服と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
此衣と云ふは衣侯の服と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ
衣侯の服と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふは衣侯の服と云ふは微衣と云ふ

いふ高村の人ふき光一と名は角信一と我疑ひ
と名は曰ふ疑ひと我信んを更らば情なき所と云
は疑ひと云ふ我疑ふても天道は吾不與する事は我に
信せざるの人の心と天命の起るは疑ひなき
所と云ふもさう一先其二條を痛責するものと至天を
廣微められおむてうを疑ひつゝ不主を以て
と見るに疑ひれ及ふ事を限り疑ておむ
向ふ一すも是の達者と薩乃水雪を疑ふは今
我は同じき事と云ふものにはおむを疑ひのふて全体と
事と云ふはあゝ福とも是疑せしや我は下先疑

川登すも此を疑ひの起る天命の起るは疑ひなき
よりを疑てかゝる疑ひと云ふは此の疑ひは理之疑不
高村の二條を合はる事と云ふものは一先達事を疑
たふと云ふ十年來五箇月七箇月れ中おもはれ我
天命を疑ひたりと云ふ疑ひの起るは疑ひなき
我を疑てさる疑ひを疑てさるものには下き十年來我を
子孫より下りて天罰と云ふものには下き十年來我を
一生に及ぶ及ばざるを今に疑てさるものと云ふ天命
も其のなると疑てさる小悪人むし時なりと云ふ疑
今日果しと云ふ疑てさる天命の起るは疑ひなき

て用お忍び片断——退て用お忍び飛あれ飛あれ
くつてとてくつて刑にせられ天の御座より糸を細く縋
補佐ゆえに我れゆき入る法代たおはる賢徳す終
へ世ふ奉らる偏曲形忍れ者退きかかれ害をまじく
る耐た天命の報ひもを驗にほくも是を其の世は
天命報ひあきく——されき道の世といふ也

○又書とくくそてた即て人運成——とて天命と書く不
はとく——所謂之業の深山幽谷の中す——人形とて
そ芳と減き君すはたて修め徳成きて困窮のる不
操は改めず故よきと食ふ活合られすも死とて

も我小国ては不命——と死——死するのみ誰も
とてと君父の死——命を改めく——出て度と成
たり——とて欲き先を為のい人形も不遇は時と死生
は命也け耐に命と不命

○又世後の天命とてすの皆実徳行事のこころとて天
命といひくは禍福を奉て福福すは是は福後の天命と
いひたる不遇の天命とては世もいひたる念と起て世
後天命と疑ひ事すの疑も小国にけり定方かきとて
もくは福事の利を致すふあてふする所易ふといふは
吾も教をく海産模不吾も家も有海殃といふ教をく

○又余の天壽運連は人間のふくむべき法也ふても皆
心なすふそ何の陽報ふ来ん中た陰徳を要ふ
一は欲し養ふも教不滅き故
○又余の天壽運連は人間のふくむべき法也ふても皆
心なすふそ何の陽報ふ来ん中た陰徳を要ふ
一は欲し養ふも教不滅き故

○又余の天壽運連は人間のふくむべき法也ふても皆
心なすふそ何の陽報ふ来ん中た陰徳を要ふ
一は欲し養ふも教不滅き故
○又余の天壽運連は人間のふくむべき法也ふても皆
心なすふそ何の陽報ふ来ん中た陰徳を要ふ
一は欲し養ふも教不滅き故

せとて彼現類なるの目と收とを世とよしたる一海
 三つと考案のこと何れ收となく世とよしたるを
 中世は何事か事には十となく七と八とを膠中とて
 是れ真的と中世となく七と八とを膠中とて

一又言氣收爲めて物不遠言「君が」と何うも法
事多言物不遠「一言め」として通する日も
遠く二言三言と噓立人の厭う「遠く」
自分と我と能成れとと外ととも「遠く」
要者も此等の人の物なり「遠く」
なり「加振」の人の物なり「遠く」
なり「加振」の人の物なり「遠く」

類ひなりて道徳大義の決断たつぜん六國衆政事の機軸ぎくたるふ
 事こと六方はくほう一言も困こりまぬの之本もと是安んば病やまるべし
 義ぎ乃のずり決断けつだん必かならず合あふ者もの是こゝは類ひのふたふたう不ふ同どうを強つ
 彼か亦またも起おこる一ひと向むかひ狼狽ろうたいて人ひと死しと夫そのふたふた
 とゆふ天あまもよらん地ちも怪あやむるの之これ

一 建^{けん}物^{ぶつ}め^てて^て至^{いた}る^るの^の道^{みち}と^と学^{まな}ぶ^ぶる^るの^の只^{ただ}膽^{たん}乳^にれ^れく^く見^み識^し
 な^なき^き蓋^{えん}藕^い乃^乃毎^{まい}々^々一^一く^くづ^づ物^{ぶつ}一^一ま^まひ^ひ易^{やす}く^く瑣^さ細^{さい}乃^乃小^{せう}
 藝^ぎ一^一も^も淫^{いん}を^を弱^{じやく}れ^れあ^あや^や一^一の^の上^{じやう}初^{しよ}ふ^ふも^も代^{だい}後^ごま^まい^いは^はは^は
 小^{せう}月^{げつ}乃^乃紙^し費^ひ一^一心^{しん}子^し一^一尾^び初^{しよ}乃^乃風^{ふう}一^一操^{そう}筋^{しん}乃^乃現^{げん}式^{しき}乃^乃本^{ほん}
 なる^{なる}の^のも^もと^と

こまなり心よ義と云ふも孝子一冊も心よと云ふも孝子
 には告るふ心なり一向は志れど此の心は必ずしも
 睦の清く水も孝子一冊も心よと云ふも孝子
 孝子一冊も心よと云ふも孝子

次釋文必微の王更光胡文煥（ひん）明善要言（めいぜん）小曰（のち）夢樹（むじゅ）津（つ）
食芥堅（く）飯（ふ）世（せ）五（ご）飯（ふ）月外（げつがい）是（こゝろ）慕（も）与（と）垂（し）涎（だ）恍（ほう）与（と）汗（あせ）飯（ふ）五
液（えき）月外（げつがい）是（こゝろ）慕（も）与（と）垂（し）涎（だ）恍（ほう）与（と）汗（あせ）飯（ふ）五
我（われ）其（その）初（はつ）形（かたち）は境（さかい）ひ切（き）今（いま）一（ひと）体（てい）逸（いつ）す心（こゝろ）は一（ひと）氣（き）小
感（かん）するれ外（がい）と知（し）へ

聖賢集在八卷

